

授業用教材集

《蔡上》の魅力



制作：伝統音楽普及促進事業実行委員会

協力：同志社大学ライフリスク研究センター

助成：文化庁伝統音楽普及促進事業

「葵上」の魅力



コンテンツ

- ・能について
- ・能の歴史
- ・《葵上》基本情報
- ・登場人物
- ・横川の小聖と六条御息所の怨霊との戦い
- ・面（泥目と般若）
- ・物語の背景：車争い事件
- ・《葵上》のあらすじ
- ・《葵上》の構成
- ・ワキ方
- ・ワキ方の名ノリ
- ・謡について
- ・シテの謡（三つの車）
- ・シテの謡（重い知らずや）
- ・型
- ・囃子
- ・笛
- ・小鼓
- ・大鼓
- ・太鼓
- ・笛の唱歌
- ・エア小鼓を構えよう
- ・掛け声をかけよう エア小鼓を打とう
- ・「アツサ」「ノット」「一ツ頭」の手組を打とう
- ・《葵上》観世流謡本全詞章（p.1～p.4）
- ・現代語訳《葵上》（p.1～p.7）
- ・能楽用語集—《葵上》を読み解くために（1）、（2）

能について

能は、室町時代より続く芸能で、謡、囃子による音楽に所作を伴い、能面、能装束を用いて、能舞台と言われる専用の舞台上で演じられる。

魅力を失った芸能はすぐに廃れるが、能が 600 年以上続いているのは、いつの時代の人をもひきつける魅力を持っているからに他ならない。

無駄をそぎ落とし、密度を高めた動き、西洋の音楽では律しきれない音楽を用いて、人の感性に訴えかける舞台は、人間存在の本質を主題とする。神が現れ、または靈魂がこの世への執着を訴えに現れ、或いは非常事態絶体絶命の状態での物語展開など、通常ありそうもないことが舞台上で演じられるが、これは人の心の内側の問題を可視化したものである。

理論で理解せずとも、芸術の世界では、心から心に伝わるものがある。若いうちから、こういった世界にふれ、感性豊かに育つことが重要であると考えます。

能の歴史

芸能は宗教性、娯楽性を伴って、古代からいずれの地域でも続いてきた。日本では、大陸渡来の伎楽、舞楽などが朝廷、寺社で行われると共に、唐散楽も渡来して、もっぱら庶民に愛好された。唐散楽はやがて猿楽と言われ、その流れが続いていく。

14世紀、猿楽の座があちこちで、神事に伴う祝福芸である「翁猿楽」を行うと共に、劇を上演するようになる。大和で活躍した観阿弥（1333-1384）、世阿弥（1364-1444?）親子は地元で人気が高まり、やがて京の都に進出して、足利義満の寵愛を受けるようになる。金閣、花の御所を築いた義満は、武家の棟梁でありながら、平安文化を好んだ所から、世阿弥も、庶民相手の芸を転換し、「源氏物語」「伊勢物語」「平家物語」などの先行文学を題材とした能を作り出した。その後も多くの舞台人が、個性ある能を作り出した。

戦国時代を経て、武家の好むものとなった能は、やがて式楽となり、武家の庇護の元、芸に磨きがかかる。江戸時代になると、演技は精緻になり、西陣織りの技術による能装束、また能面などの完成により、ますます密度の高い世界が描かれるようになった。

明治維新、世界大戦など、幾多の困難な時代を経ても、必死に演じ続けた人たちの努力、芸の持つ魅力、普遍的な主題のゆえ、現在まで人々を魅了し続けている。

基本情報	<p>作者：^{ぜ あ み}世阿弥 改作</p> <p>素材：「源氏物語」の「葵」の巻</p>
登場人物	<p>前シテ：^{ろくじょうのみやすどころ}六条御息所の生霊</p> <p>後シテ：六条御息所の怨霊</p>
	<p>ツレ：^{てるひ み こ}照日の巫女</p> <p>ワキ：^{よかわ こひじり}横川の<small>小聖</small></p>
	<p>ワキツレ：廷臣</p> <p>アイ：従者</p>
	<p>出し<small>こそで</small>小袖：葵上</p>

登場人物



・ 葵上



・ 前シテ



・ 廷臣



・ 照日の巫女



・ 横川の小聖

横川の小聖と六条御息所の怨霊との戦い





泥眼



般若

物語の背景：車争い事件



「車争い図屏風」 作者不詳 仁和寺蔵
『絵巻で楽しむ源氏物語九帖「葵」』朝日新聞出版 p.2-3より部分転載

《葵上》のあらすじ

物語は①から⑩に区分される。

- ①朱雀院の御代、左大臣家では息女の葵上が物怪に憑かれて重態である。
- ②物怪の正体を知るために梓弓で霊を呼ぶ「梓の法」の名手、照日の巫女が招かれた。
- ③その法にかけられて六条御息所の生霊が姿を現す。
- ④～⑥六条御息所は、恋人、光源氏の正妻である葵上への嫉妬に駆られ、後妻打ちをする。
思い乱れる御息所は葵上の命を奪いかねないくらい激しく、破れ車に乗って姿を消す。

—中入—

- ⑦偉大な法力を持つ修験者、横川の小聖が呼ばれる。
- ⑧小聖の加持祈祷によって御息所の心に巣くっている嫉妬の気持ちが鬼女の形で現れ、
小聖に襲いかかる。しかし、
- ⑨激しい戦いの末に祈り伏せられて、
- ⑩御息所は成仏する。

《葵上》の構成

前 場	起 ①～④	起 ① 廷臣、巫女の登場
	承 ⑤～⑥	承 ② 巫女による梓の法
		転 ③ 御息所の登場 ④ 御息所の出現と巫女・廷臣の会話 ⑤ 御息所の告白 ⑥ 御息所の後妻打と述懐
		結 ⑥ 末→中入
後 場	転 ⑦～⑨	起 ⑦ 中入—廷臣・従者・小聖の会話
		承→転 ⑧ 小聖の祈祷・鬼女の登場 ⑨ 鬼女・小聖の戦い
	結 ⑩	結 ⑩ 結末

ワキ方

① ワキは、曲の舞台設定をします。

舞台の最初に登場して話すのがワキ。

現実を生きる男性の役なので、面はつけません。

どの時代の、どういう人が、これからどのような事をするのか。

親切にも、はじめに説明してくれるのです。

シテが登場すると、会話を交わし、曲の進行を見守っていきます。

② ワキは、曲の^{くらい}位を作ります。

能には、各曲に「位」がそれぞれあります。

「位」とは、謡・所作・囃子・面・装束・全体の品位などを指して使われます。

重厚な曲なのか、軽快な曲なのか。喜怒哀楽は？春夏秋冬は？

一曲の「香り・匂い」を開口一番に作り上げ、シテを舞台へと誘うのです。

“五感”でその舞台設定を味わってみてください。

ワキの名ノリ

✓そもそもこれは。朱雀院すざくいんに仕入奉るつか たてまつ臣下おんものけなり。

さても左大臣の✓御息女おんそくじよ。葵上の✓御物怪おんものけ。

も 以つての外ほかに✓御座候程ござうらひほどに。貴僧きそう✓高僧こうそうを請じしやう。

たいほうひほうつりりようさまさま おんこと
大法秘法医療様々の✓御事にて候へども。

その験更しるしやういに✓なく候。

ここに✓照日てるひの巫女みこと申して。

まさ 正しき✓巫女の渡り候程に。かの✓巫女を請じ。

いきりようしりよう
生霊✓死霊の境を。梓あづなに掛けさせ申さばやと

✓存じ候。

(✓=オコシ、ヒラキ)

左の文の青字部分に自分を表す言葉を入れて名乗ってみましょう。

✓そもそもこれは。源氏高校三年で音楽係を担当する

✓生徒 なり

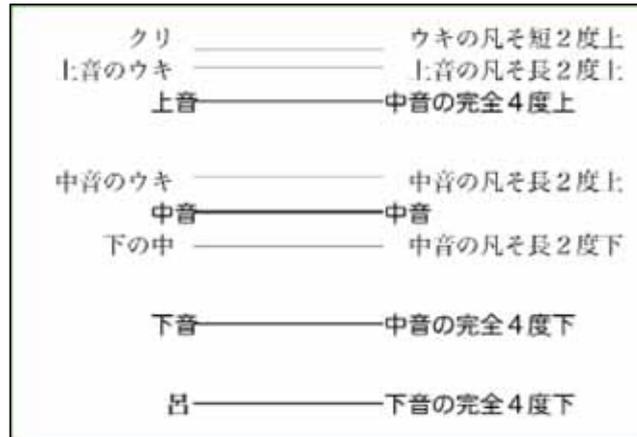
うたい
謡について

能の脚本はすべて謡で構成される。

役謡：シテ、ワキ、ツレなどの^{たちかた}立方が謡う。

地謡：齊唱

謡の音程の枠組



シテの謡：三つの車に法の道
火宅の門をや出でぬらん

クリ
ウキ
上音

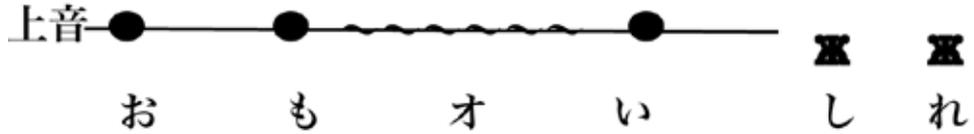
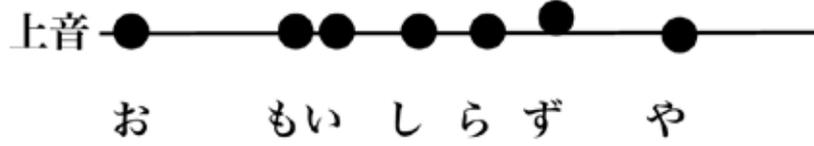
み つ の く る ま に の オ り イ の み ち

か ア た ア く の オ オ か ど を や い で ぬ う ら ん ン

「声」
シテ上
セイ和歌
火宅の門をや出でぬらん
三つの車に法の道

一声：高音域を主とする七五調韻文の謡事

シテの謡：思い知らずや 思い知れ



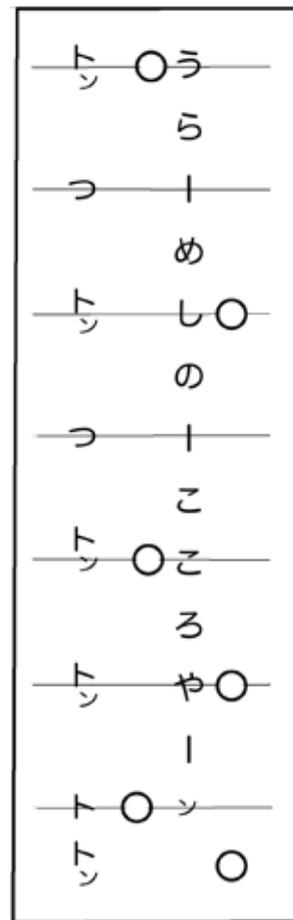
- 凡例 ● ヨワ吟 息づかいの強弱で謡い進める趣で、音程が動揺しやすい。
- ツヨ吟 ツヨ吟と比べると音がなだらかで安定している。

ツレ上
 ヨワ吟
 思ひ知らずや
 シテ
 ツヨ吟
 思ひ知れ

型（足拍子）：うらめしの心や



葵上を打擲する六条御息所の内面は地謡によって
「恨めしの心や、あら恨めしの心や」と謡われる。



囃子：能楽の器楽演奏に関する汎称。動詞「はやす」の連用形名詞化。

五人囃子



発音体の位置が
上から下へ順に並ぶ
右から 謡
笛
小鼓
大鼓
太鼓

能の囃子（四拍子）



右から 笛
小鼓
大鼓
太鼓

笛（能管）：能における唯一の旋律楽器

スス竹製

全長およそ 39cm, 外径およそ 2.5cm



頭金（能管独特の工夫の一つ）

ヒシギ（最高音域の鋭い音）を吹く

小鼓： 胴、表革、裏革、調べ緒からなる。

胴は主に桜材。全長約 25cm。

革は若い馬の皮で打つ方を表革、

反対側を裏革と呼ぶ。調べ緒は縦横の 2 本ある。

1 本は表裏の革を縦に千鳥掛けにし、もう 1 本は横に掛ける。



左上 表革と裏革

右上 締め具合を加減する。

左下 小鼓を構える。

右下 左手で調べ緒の締め加減を調整して音色と音高を変化させる。

大鼓：基本構造は小鼓と共通している。
革の周辺に竹の皮で巻いた鉄輪を入れ、
革はこれを包んで折り返し、糸で縫い止める。



大鼓と小鼓



演奏する前に炭火で革を乾燥させる。



「指あて」と「あて革」

革の張りが大変強いので

「指あて」と「あて革」をつけて打つ。

太鼓：胴、表革、裏革、調べ緒からなる太鼓を又右衛門台と呼ばれる台の上に載せ2本の撥で打つ。胴は直径およそ26cm、高さは15cmの盥形で、主として櫟、栴檀で作られている。表側の中央に直径およそ4cmの鹿革を張り（中央の白いところ）、打つときは必ずそこに撥をあてる。



中撥



肩の撥

上 太鼓の表革
下 櫟の胴と又右衛門台

笛の唱歌：

梓 ヒヒヤ——ウ ヒヒヤ——ウ タ——ウタ——ウタ——ウタ——ウ——

タ——ウタウ ヒュ——ィ ヲヒヤ——ラ—— ヒウ——リ——ウ

ヒヒヤ ウル—— ロ——ィヤ—— ホヒヤ——チョ——ウチョ——ウ——

ノット ヒヒヤ——ウ タ——ウタ——ウタ——ウタ——ウタウ——

《葵上》では類似する笛の旋律が
前場と後場に吹かれます。

タ——ウタウ ヒュ——ィヤ—— ヒウ——リ——ウ

笛の音にのって、
前半では御息所の生霊が、
後半では怨霊が現れます。

ヒヒヤ—— ウル—— ロ——ィヤ—— ホヒヤ—— チョ——ウチョ——ウ——

笛の旋律は唱歌によって
伝えられてきました。

エア小鼓を構えよう



① 左手でグー

② 右手でパー

③ グーをパーで受けて

④ 右肩へ

完成!

音の種類: 音には、大きく分けて甲高い甲の音と、柔らかい乙の音があり、それぞれに大小の音があり、全部で「チ」「タ」「プ」「ポ」の4種類になります。

音質	音量	唱え方	記号	右手の打ち方	左手
甲の音	小	チ	●	薬指だけで革の縁を小さく打つ	握る
	大	タ	△	中指と薬指で革の縁を大きく打つ	握る
乙の音	小	プ	フ	人差し指だけで革の中央を小さく打つ	扱う
	大	ポ	○	全部の指で革の中央を大きく打つ	扱う

掛け声をかけよう

記号	発音
ヤ	ヨオ
ハ	ホオ
イヤ	イヤー

エアー小鼓を打とう



ツ (息を込める)

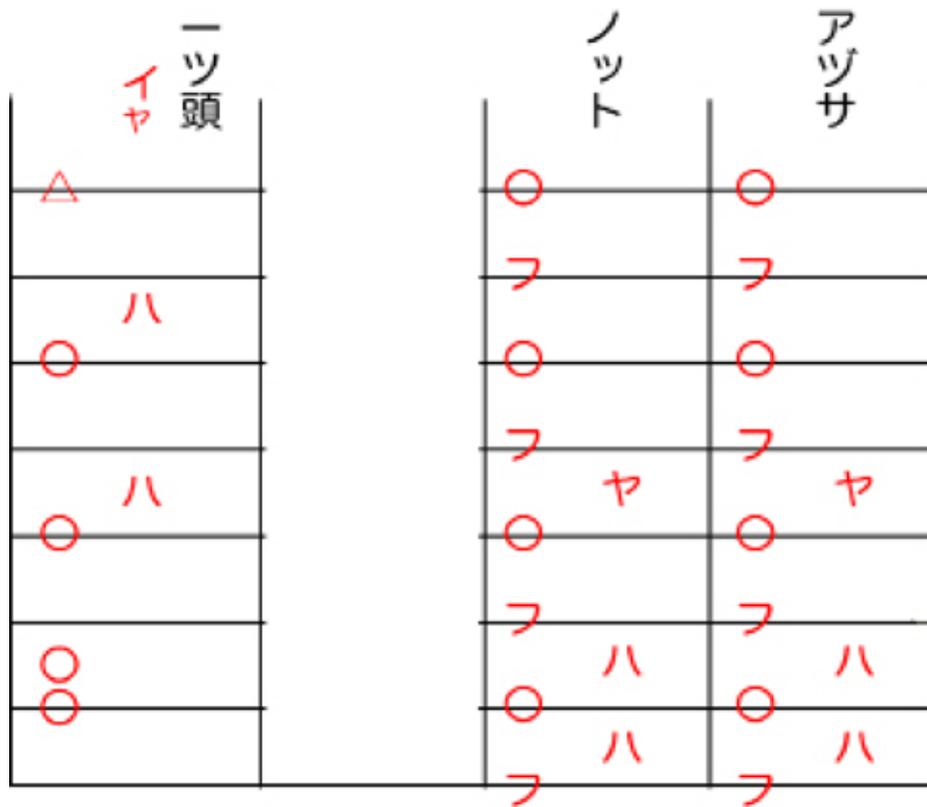


ホー (右手を構えて)



ポン (いい音が出たかな?)

「アツサ」「ノット」「一ツ頭」の手組を打とう。



手組：囃子の「型」を指す技法用語。

一ツ頭：能の「三番三」〈揉之段〉、「翁」に用いられる特殊な手組。

① 廷臣・巫女の登場

〔名ノリ〕ワキツレ へそもそもこれは。朱雀院に仕へ奉る臣下なり。さても左大臣の御息女。葵の上の御物怪。以つての外に御座候程に。貴僧高僧を請じ。大法秘法医療様々の御事にて候へども。その験更になく候。ここに照日の巫女と申して。正しき巫女の渡り候程に。かの巫女を請じ。生霊死霊の境を。梓に掛けさせ申さばやと存じ候。

② 巫女による梓の法

〔問答〕 ワキツレ へ懸て梓に御掛け候へ
〔詠句〕 ツレ へ天清浄地清浄、内外清浄六根清浄。
〔上ノ詠〕 ツレ へ寄り人は今ぞ寄りくる長浜の蘆毛の駒に、手綱ゆり懸け。

アツサ

③ 御息所の登場

〔一声〕 シテ へ三つの車に法の道 火宅の門をや出でぬらん。
夕顔の宿の破れ車、やる方なきこそ悲しけれ。
〔次第〕 シテ へ浮世は牛の小車のくく廻るや報いなるらん
〔サシ〕 シテ へおよそ輪廻は車の輪の如く、六趣四生を出でやらず、人間の不定芭蕉泡沫の世の習ひ、昨日の花は今日の夢と、驚かぬこそ愚かなれ。身の憂きに人の根のなほ添ひて、忘れもやらぬ我が思ひ、せめてや暫し慰むと、梓の弓に怨霊の、これまで現れ出でたるなり。
〔上哥〕 シテ へあら恥かしや今とても、忍び車のわが姿。
〔上哥〕 シテ へ月をば眺め明かすともくく月には見えじ陽炎の、梓の弓の末強に立ち寄り憂きを語らん。

④ 御息所の出現と巫女・廷臣の会話

〔口〕 シテ へ梓の弓の音は何処ぞくく東屋の母屋の・妻戸に居たれども
〔下ノ詠〕 ツレ へ姿なければ訪ふ人もなし
〔サシ〕 ツレ へ不思議やな誰とも見えぬ上臆の破れ車に召されたるに、青女房と思しき人の、牛もなき車の轅に取りつき、さめざめと泣き給ふ傷はしさよ。
〔問答〕 ツレ へ若しかやうの人にててもや候らん
ワキツレ へ大方は推量申して候、唯つゝまず名をおん名乗り候へ。

⑤ 御息所の告白

「クドキグリ」シテ 〱それ姿婆電光の境には、恨むべき人もなく、

「クドキ」シテ 〱唯今様の弓の音に、引かれて現れ出でたるをば

如何なる者とか慰し召す、これは六条の御息所の怨霊なり
我世に在りし古は、雲上の花の宴、春の朝の御遊ぎょいうに馴れ

仙洞の紅葉の秋の夜は、月に戯れ色香に染み
花やかなりし身なれども、

衰へぬれば朝顔の、日影待つ間の有様なり、
ただ何時となき我が心、もの憂き野辺の早蕨の、

萌え出でそめし思の露、
かかる恨を晴らさんとて これまで現れ出でたるなり

「下哥」地 〱思ひ知らずや世の中の、情は人のためならず。

「上哥」地 〱我人の為つらければ、〳

必ず身にも報ふなり

何を歎くぞ葛の葉の、恨みは更に尽きすまじ

恨みは更に尽きすまじ

⑥ 御息所の後妻打ちと述懐

「問答」シテ 〱あら恨めしや、今は打たでは叶ひ候まじ

ツシ 〱あら浅ましや六条の御息所程の御身にて、後妻打ちの御ふるまひ、
いかでさる事の候ふべき、ただ思し召し止り給入

「掛ケ合」シテ 〱いや如何に云ふとも、今は打たでは叶ふまじと
枕に立ち寄りちやうと打てば

ツシ 〱この上はとて立ち寄りて、わらはは後にて苦を見る

シテ 〱今の恨うらみ有りし報い

ツシ 〱噴ふ恙たがひの炎は

シテ 〱身を焦がす、

ツシ 〱思ひ知らずや。

シテ 〱思ひ知れ

「段哥」地謡 〱恨めしの心や、あら恨めしの心や。

人の恨の深くして、憂き音に泣かせ給ふとぞ、

生きてこの世にましまさば、水暗き沢辺の蜩の影よりも、

光君とぞ契ちからむ

シテ

↗わらはは蓬生の、

地謡

↗もとあらざりし身となりて、葉末の露と消えもせば、
それさへ殊に恨めしや

夢にだにかへらぬものをわが契、昔語になりぬれば

なほも思ひは真澄鏡。その面影も恥かしや

枕に立てる破車、うち乗せ隠れ行かつよ

うち乗せ隠れ行かつよ

⑦ 中人・物着 ― 廷臣・従者・小聖の会話

〔問答〕

ワキツレ

↗いかに誰か有る。

狂言

(省略)

ワキツレ

↗葵上の御物怪以ての外に候程に。汝は横川へ行き。小聖を請じ
て来たり候へ

狂言

(省略)

〔問答〕

ワキ

↗九識の窓の前、十乗の床のほとりに
瑜伽の法水をたゝへ 三密の月を澄ます処に。案内申さんと云

ふはいかなる者ぞ。

狂言

(省略)

ワキ

↗さて何の為の御使にて有るぞ。

狂言

(省略)

〔問答〕

ワキ

↗別行の子細候へども。大臣よりと承り候程に。別行を破り参上
するにて候。

狂言

(省略)

狂言

(省略)

ワキツレ

↗心得て有る。

ワキツレ

↗夜陰と申し御参目出とつ候。

ワキ

↗別行の子細候へども。大臣よりと承り候程に。別行を破り参じ
て候。さて病人はいづくに渡り候ぞ。

ワキツレ

↗あれなる大床に御座候。急ぎ加持有って給はり候へ。

ワキ

↗さらばそと加持申そつずるにて候。

⑧ 小聖の祈禱・鬼女の登場

「フット」

「フット」と呼ばれる特殊な囃子が演奏される。
その間に、ワキは加持祈禱の準備、そして加持祈禱を開始する。

ワキ 行者は加持に参らんと、役の行者の跡を継ぎ、

胎金たいごん面部のおもて峯を分け、七宝しちほうの露をすずみひひし篠懸しのがすけに、

不浄を隔へだつる忍辱にんじやくの袈裟けさ、赤木の珠数しじゆずのいらたかを

さらり／＼と押しもんで一祈こそ祈つたれ

東方とうほうに降三世明王かみよみさんぜみょうおう、曩莫なまく三曼多さんまんた縛曰羅赦ばくいつらしゃ

⑨ 鬼女・小聖の戦い

「イノリ」

「掛ケ合」シテ いかに行者早帰り給へ、帰らで不覚し給ふなよ

ワキ たとひ如何なる悪霊なりとも、行者の法力尽くべきかと、
重ねて珠数を押しもんで

「中ノリ地」地謡 東方とうほうに降三世明王かみよみさんぜみょうおう

シテ 南方軍荼利夜叉なんぽうぐんたりにや

地謡 西方大威徳明王せいほうだいゐとくめいおう

シテ 北方金剛ほくぽうこんごう

地謡 夜叉明王やしゃめいおう

シテ 中央大聖ちゆうおうだいせい

地謡 不動明王ふどうめいおう、曩莫なまく三曼多さんまんた縛曰羅赦ばくいつらしゃ、戦拏せんた摩訶路灑まかろしゃ拏な

娑破吒也しゃぱた叱し怛たん羅吒らた悍はん唎り、聴我説者ちやうがせつしや得大智慧とくだいぢゑ

知我身者ちやうがしんしや即身成仏じやくしんじやうぶつ

「□」シテ あら／＼恐ろしの般若声や。これまでぞ怨霊

この後又も来るまじ

⑩ 結末

「キリ」地謡

読誦の声を聞く時は、

悪鬼心を和らげ 忍辱慈悲の姿にて、菩薩もここに来迎らいごうす

成仏得脱の、身となり行くぞありがたき

趣旨…生徒たちが六条御息所の傷ついた自尊心や抑圧された激情を共感し、能の演目に昇華された心の動きと技を理解することを目的に台本を制作しました。主として三宅晶子著《対訳でたのしむ葵上》(檜書店二〇〇〇年)と(the-noh.com《演目事典 葵上》を参照しています。

現代語訳

《葵上》

登場人物 前シテ 六条御息所の生霊 (面泥眼)

後シテ 六条御息所の怨霊、鬼女 (面般若)

ツレ 照日ていひの巫女 (面小面)

ワキ 横川よかわの小聖

ワキツレ 廷臣

間狂言 左大臣家の従者

一 巫女・延臣の登場

後見によって、小袖が一枚運ばれ、舞台の正面前方に広げて置かれる。病床の葵上を表す。

照日の巫女が登場し、脇座に座る。続いて廷臣が登場し、葵上に取り憑いている物の怪の正体を知るため、照日の巫女に梓の法を行わせることを説明して、地謡前に座る。

廷臣 私は朱雀院すずせきいんにお仕えるものです。左大臣の御息女、葵上に取り憑いて

いる物の怪が、常軌を逸しておりますので、高貴・高德の僧を次々招いて、秘伝かじの加持祈祷かじきとう、医療など様々に試みたのですが、少しも効果が現れません。幸い照日の巫女という梓の法の名人がおりますから、巫女を呼んで、取り憑いているのが生霊死霊か、梓の法で占わせようと思いません。

二 巫女による梓の法

廷臣に申しつけられて、照日の巫女は梓弓の弦をならしながら靈魂を呼び寄せる呪文を唱える。

大小鼓が「アツサの囃子」と喚ばれる特殊な演奏を始める（小鼓の単調な打法は弓の弦をはじく音を表す）と、巫女は実際の招魂の場で唱えられたのと同文の呪歌を唱える。

廷臣 さっそく梓の法をお始めなさい。

巫女 天清淨地清淨、内外清淨（ないけ）六根清淨。（天も地も内も外も身体の中も、すべて清めたまえ）

巫女 寄り人は、今ぞ寄り来る長浜の、芦毛の駒に手綱揺り掛け。（取り憑いている人は、今こそ姿を現す。長浜の葦の原の中を芦毛の駒に乗り、手綱を揺らして）

三 御息所の登場

梓弓の弦音に弾かれながら、六条御息所の生霊（前シテ）が姿を現す。御息所は皇太子妃であった身に相応しい高貴な姿であるが、壊れた車に乗っているという設定である。妄執に取り憑かれているため、車の輪のように輪廻する身であることを述べ、恨み言をいうために現れたと語る。世阿弥当時の演出では、シテは青女房（若い女房）役のツレを伴って車に乗って登場した。現行演出ではシテは一人で登場し、車は出さない。

〔二声〕 霊の登場を誘いかけるよつな、リズムに乗った登場案が演奏される中を六条御息所の生霊が現れる。

御息所 仏様がお導きになる三つの車に乗ってゆけば、苦痛に満ちたこの世から本当に逃れることができるのでしょうか。私のように夕顔の咲く宿固然のみすぼらしい破れ車に乗っているのでは、それはできないでしょうし、私の心を晴らす術もありません。なんと悲しいことでしょう。

御息所 憂き世が憂い深いのは、牛の牽く小車の輪のように因果がめぐり巡っているのです、この世に生きるつらさは前世からの行いの報いなのでしょう。

御息所 そもそも輪廻というのは車の輪のようなもので、地獄・餓鬼^{がき}・畜生・修羅・人間・天上の六趣や、胎生・卵生・湿生・化生という生物の生まれ方から離れることはできないのです。人の運命は定めなく、芭蕉の葉や水の泡のようにはかない存在です。昨日咲いた花も、今日は夢のように消えてしまいます。それに気付かないことこそ愚かです。そんな我が身のつらさに加えて、人を恨む気持ちがつきまるとして、自分ではどうしようもなく忘れられなくなったこの思いを、少しの間でも慰められるかと思ひ、梓弓に引かれてここへやってきたのです。

御息所 思ってみればなんと恥ずかしい今の姿。その上また賀茂の祭の時のように人目をしので粗末な車に乗っています。

御息所 私が月を眺めて夜を明かすことはあっても、月（他人）には私の姿はかげろうのように見えないのだから、梓弓の占いの弦（^{うづま}末筈）に寄り添って、辛い気持ちを語りましょう。

四 御息所の出現と巫女・廷臣の会話

六条御息所の霊は梓の法に引かれて寄って来るが、その姿は照日の巫女にしか見えていない。廷臣は、巫女の説明から、怨霊の正体が御息所だと知る。

御息所 梓弓の音はどこから聴こえてくるのでしょうか？どこから聴こえてくるのでしょうか？

巫女（青女^{あおに}房） 寝殿造り中央の母屋に設けた開き戸のところにいるのですが御息所 姿は見えないので、言葉を掛ける人もいません。

巫女 不思議なことに誰ともつかない高貴な女の人が、壊れた車にお乗りになつておられるところに、お供らしき女の人が出て、牛も繋いでいない車の長い柄にとりつき、さめざめと泣く姿が、なんともおいたわしいことです。

巫女 もしや、例のあのお方ではないでしょうか。

廷臣 だいたいは想像していたとおりです。どうぞ隠さずお名前をお名乗りください。

五 御息所の告白

六条御息所の霊は名乗って正体を明かす。巫女の口を通して御息所の霊が語りかけるため延臣は、巫女が御息所の振舞をしている姿を見ていることになる。舞台上で繰り広げられる光景は、御息所の物語を巫女が表すことになる。

御息所

本当に、人生など、稲妻が走るように短いものだから、恨む人もなく、自分を悲しむなどということもないはずなのに、一体いつから生霊がさまよい出るようになったのでしょうか。

御息所

今梓の弓の音に引かれて姿を現した私を、誰だとお思いになりますか。私は、六条御息所の怨霊です。先の皇太子がご存命のころは、宮中の花の宴をはじめ、春の朝の管弦の遊びに親しみ、御所での紅葉の秋の宴では、月に戯れ、(光君との)恋の色香に染まり、それはもう楽しくて、華やかな毎日をすごしていました。けれども、気運が衰えてくれば、朝顔が日の光を待つような哀れではかない有様になりました。嘆きに沈む心には、野辺の早藤が萌え出るように憎しみが芽生えてしまったのです。その恨みを晴らすと、ここまでやってきたのです。

地謡

思い知るがいい。人に思いをよせればいつかは自分に返ってくるというものなのに。

地謡

あなたのせいで私が辛い思いをしているのだから、必ず、あなたに報いがあるって当然というもの。何を嘆いているの。葛の葉の裏のように、私の恨みは決して尽きることはない。

六 御息所の後妻打と述懐

六条御息所の靈魂は、激高して、後妻打にする。いったんは押しとどめようとした青女房も、結局力を貸す。御息所は本心を告白し、憎い葵上を連れ去るような勢いで病床に迫り、そのまま車に乗って姿を消す。

御息所

何と何と、恨めしい事。今となっては、この女を打ち据えずにはいられない。

巫女(青女房)六条の御息所ともあろうご身分の方が、後妻打ちのお振舞い

とは、

なんとということ。そんなことがあってよいものでしょうか。どうか心を静め、おやめください。

御息所 いいえ、あなたがどんなに止めても、今は打たずにはいられないのです。と、枕辺に立ち寄ってはっしと打つ。

巫女（青女房）そこまでおっしやるなら、私は足下を苦しめましょつ。

御息所 今の私の恨みは、あなたの仕打ちへの報い、

巫女 怒りの炎は

御息所 私の身を焦がすのです。

巫女 思い知るがいい。

御息所 思い知れ

地謡 ああ、恨めしい、なんと恨めしい、わが心。

私がどんなに深く恨んで、あなたが苦しさ悲しい声をあげて泣かれても、あなたは生きている限り、光君といっしょにいられ、契り続けるの
でしょう。

御息所 それに引き替え、私は荒れ果てた宿で

地謡

何もなかったかのように捨てられて、葉の上の露のようにはかなく、消えてしまふのです。そう思うだけでも、あなたが恨めしい。夢の中でさえ光君との契りは取り戻せない。私たちの仲は、もう過去のものになってしまったのです。だからこそ、一層恋しさも募り、鏡に映る私の面影も恥ずかしくなります。いっそあなたを、枕元にあるこの壊れた車に乗せて、連れて行って、どこかに隠れてしまいましょつか

（中入）

七 廷臣・従者・小聖の会話

廷臣は従者を呼び、葵上の物の怪は、いよいよ尋常でないので、横川の小聖をお頼みするように言いつける。従者は急ぎ小聖を迎えに行く。

小聖 私は、悟りを得るために九識くしち、十乘じゅうじやう、瑜伽うぎあと、仏と一体の境地になることを願って、手に印を結び、口に呪文を唱え、三密の行法を行っていたところである。そこに訪ねてきたのは誰だ？

従者は、左大臣より葵上の物の怪調伏の依頼を持ってきたものだ、と告げる。

小聖 このところ、特別の行を行ってどこへも出かけずにいたのですが、外ならぬ大臣殿からの御使者とあっては、すぐに参上いたしましたでしょう。

従者が廷臣に報告している間に、小聖は、葵上の様子を見て、すぐ加持を始めるという。

廷臣 さっそくお越しいただき、ありがとうございます。

小聖 丁寧に恐縮です。さて病人はごちらにおいででしょうか。

廷臣 あの広間にいらっしやいます。

小聖 ではさっそく加持祈禱を始めましょう。

廷臣 よろしくお願い致します

八 小聖の祈禱・鬼女の登場

横川の小聖は修験道の由緒正しい山伏姿に身なりを整え、加持祈禱を始める。鬼女〔六条御息所の怨霊〕は、それに引かれるようにして、再び姿を現す。

行者の加持祈禱の様子を表す囃子のなか、鬼女は上着を頭から被ったまま、大鼓前に移動してうづくまる。

小聖

行者とは、かつて山伏修験道の始祖である役行者えんのまうじやの教えを受け継いで、胎藏界金剛界たいざうがいこんがいの両部の山の峰に登り、七宝樹林に結ぶような美しい露をはらった篠懸すずかけの衣を身につけ、忍辱にんにくの袈裟けさを着て赤木でできた刺高したかの数珠をさらりさらりと押し揉んで、一心に祈るところです。東方に降三世

明王、曩莫なまく二曼多まんた縛日羅はくじつら赦

九 鬼女・小聖の闘い

密教で信仰する五大尊明王を呼び出して祈り続ける横川の小聖と、鬼女〔六条御息所の怨霊〕の闘争。祈禱の文句は、実際に行われていた山伏祈禱の常套文句である。

〔祈り〕

山伏と鬼女の闘争シーン。四節構成の笛・小鼓・大鼓・大鼓による演奏。太鼓が「祈り地」を打ち、それに合わせた勢いのよい激しい演奏に特色がある。

鬼女 行者よ、早くお帰りなさい。帰らないで失敗なさいますなよ。

小聖 たとえ、どんな悪霊であっても、行者の法力が尽きるはずはないと、何度も何度も数珠を強く揉んで。

地謡 東方に降三世明王

くんだりやしやみょうおう

鬼女 南方に軍荼利夜叉明王

地謡 西方の大威徳明王

だいいとくみょうおう

鬼女 北方の金剛

地謡 夜叉明王、

鬼女 中央の大聖

だいじょう

地謡

不動明王、なだむね（真言を唱えて）なま曇真三曼多縛曰羅赦、せん戦峯摩訶路灑峯、せ娑

そはたつたんかんま

破吒也昨怛羅吒悍鉢、ち聴我説者得大智慧、ち知我身者即身成仏わが説を

聴く者は仏の知恵を会得し、わが心を知る者はその身のまま成仏する。

鬼女 ああなんと恐ろしい、恐ろしい無上無比の知恵の声よ。もうこれまで。

二度とここへやって来るようなことはないでしゅ。

十 結末

鬼女は、横川の小聖の祈りによって調伏され、怨念に支配されていた悪心が消滅して、悟りの境地へと達した。

地謡

祈りの声が心に届いたので、悪鬼と化していた御息所の魂は心を和ませた。すると、すべてを許し受け止めてくださる慈悲深い姿で、菩薩もお迎えにいらっしやう。

御息所が怨念を断ち切り、悟りを開いて、成仏できる身となっていくのは、何とありがたいことだろう。

能楽で頻繁に用いられる用語の意味を『能楽大事典』(筑摩書房、2012)を参考にして記しました。

1) 役種

シテ 一曲の主役のこと。前後二場からなる能は前シテ・後シテと呼び分ける。

ワキ シテの相手役。役柄は朝臣、神職、僧侶、武士、山伏など必ず男性の現在体なので、面をつけることがない。

ツレ 「連」の意味。シテ方につくシテツレとワキ方につくワキツレがある。それぞれシテやワキよりも比重が軽い。

地謡 能の構成部分および役種。シテ、ワキ、ツレ、子方などの立方が加わらない斉唱の部分。地謡の部分を謡う役も地謡あるいは地と呼ばれる。

後見 開演前に面、装束、小道具、作り物などを点検したり、シテの装束を着けたりし、上演中は後見座に座して演技を注視し、舞台の進行に応じて、装束の乱れを直したり、作り物や小道具を出したり引いたりする、また、不測の事態では後見が即座にシテに代わって演技を続行する。

あい 間狂言 能の中で狂言方によって担当される部分。演じる役は間あいあるいは狂言と呼ばれる。

2) 演出・表現の技法

ツヨギン 強吟 謡の発声法。息づかいの強弱で謡い進める趣で、音程が動揺しやすい。一般に、祝言の趣を表わすところ、および戦闘や激しい行動が連続する場面に用いられる。

ヨワギン 弱吟 ツヨ吟と比べると音がなだらかで安定している。一般に優美、風雅、温和、哀愁などの趣を表すところに用いられる。

アツサ (梓) 巫女の梓弓の音に惹かれてシテが姿を現す場面で小鼓は「梓ノ手」という特殊な地を打ち続ける。

イノリ (祈) 囃子事的一种で、謡なしに囃子の演奏によって所作が演じられ、写実的で憑依的な動きを見せる働事。ワキの山伏や僧が、シテの鬼女や鬼に立ち向かい、法力でイノリ伏せる様を演ずる。

ノット (祝詞) 囃子事。僧や山伏などの祈祷がおこなわれる場面の導入として演奏される。小鼓がプ、ポ、プ、ポ、と、終始ノットの地を打ち続ける。

型 演技・演出における定型的表現を意味する用語。能・狂言では主として、身体動作を構成する定型的所作をさす言葉として用いられている。「謡」の定型に対しては用いない。

手組 囃子の「型」を指す技法用語。一定の打音と掛声が一定の順序に配列された最小単位の楽句。

3) 《葵上》謡本全詞章の上部 [] 付き用語 (全て能の構成要素で劇構造を支える単位を表す小段)

名ノリ 登場人物がはじめに自己の姓名または身分の紹介、事件の経過説明、登場目的と行動予定の告白などを述べる謡事またはせりふ。

□ 類型化できない小段をあらわす記号 (拍節に抛らない拍子不合であることが多い)。

あげうた
上哥 謡事。上音の旋律を主体とし、拍子は平ノリ。謡う役はシテ、ワキ、ワキツレ、地謡の各段にわたり、用途・適用範囲が極めて広い。拍子合。

いっせい
一声 高音域を主とする七五調韻文の謡事。「ツヨ吟」「ヨワ吟」の両様ある。フシをたっぷり謡い、句末は余韻を持たせるように引いて謡う。

上ノ詠 高音域で和歌を吟唱する^{ひょうしあわず}拍子不合の小段。

掛ケ合 二つの役が交互に謡う。「拍子不合」、韻文形式の謡。ヨワ吟・ツヨ吟両様がある。

キリ 一曲の結尾にある七五調の韻文で、10句前後からなる謡。ヨワ吟・ツヨ吟両様がある。拍子合。

クドキ 謡事。苦悩、愁嘆、慕情などの思いを綿々と訴え述べる。拍子不合でヨワ吟の謡。

クドキグリ 謡事。激しい感情の高揚を示す。

さげうた
下哥 謡事。低音域の旋律を主体とした平ノリの、二ないし四句程度の短い謡事。拍子合。

サシ 謡事。七五調韻文による叙景、述懐などの内容を持つ叙情的な詞章。拍子不合。

次第 謡事。人物の名ノリ、一連の行動、一連の舞の導入となる歌。七五調の繰り返しを基本とする。拍子合。

下ノ詠 低音域で和歌を吟唱する拍子不合の小段

誦句 唱事、呪文、読経、念仏などの定型句に一定の旋律をつけてうたう、拍子不合の小段。

だんうた
段哥 謡事。平ノリ型の短い小段を数個つないで一つの小段に作ったもの。拍子合。

中ノリ地 一句に、通常の七+五文字以上、八+八文字以下の文字が詰め込んで歌われる、切迫感のある拍子合いの謡。戦闘場面の描写などがこの形式をとる。

問答 謡事。シテとワキなど、二つの役が言葉だけで、またはフシを交えてする会話体の小段。